

## 「国立台湾大学・清華大学派遣参加報告書」

京都大学文学研究科2年 市來昌冬

報告者は2018年3月25日から30日まで、台湾派遣に参加した。この台湾派遣での体験について、以下に報告する。

## ① プログラム内容

25日から28日までは台北に滞在し、国立台湾大学で26日、27日と行われた conference に参加した。これは京大の哲学研究室と台湾大の哲学研究室とが合同で行った学生向けの conference で、“Self, Subjectivity, Consciousness” という統一テーマのもと両大学の学生が研究発表を行うというものである。フッサールを研究している報告者は、そこで“the Paradox of Human Subjectivity in Husserl” というタイトルで発表を行った。

また、28日からは新竹に滞在し、29日に清華大学で行われた conference に参加した。清華大学では報告者は“the Necessity of the Dual Determination of Our Selves” というタイトルで発表を行った。

## ② 学習成果

台湾大学の conference は日本の一般的な学会と形式がやや異なっており、各発表者に対して事前に相互の大学からコメントーターを割り振り、事前に提出された論文を踏まえて、コメントーターが発表後に参加者の前でコメント・質問等を行うという形式であった。これは日本ではあまり一般的ではないが、台湾では一般的とのことだった。この形式の違いは、参加者に日本の学会とは異なった姿勢を要求するため、非常に刺激的であった。自分の研究発表に関して言えば、事前に英語で論文を提出するというのが初めてだったためとてもいい経験になったし、コメントーターからのコメント・質問が自分の研究内容についてより深く考えるいい機会になった。また、他の参加者の研究発表も、同じ統一テーマでの発表という点では関心を共有しながらも、それぞれ全く異なった観点からの発表であり、大変興味深かった。

清華大学での conference もより多様な主題の発表を聴くことができ、様々な知見を得ることができたように思う。

また、台湾大学、清華大学ともに conference は英語で行われたため、英語で哲学的な議論をする経験として非常に有意義であった。報告者は一年前のシンガポール派遣と台湾政治大学派遣に参加したが、その時と比べての英語力が多少は向上したことを感じはしたものの、さらなる英語力向上の必要性を痛感した。

## ③ 海外での経験

現地の学生と食事に行き、哲学に関する話の他にも学生生活についてや台湾と日本の文化についてなど様々な会話を楽しむことができた。

また、日本以外のアジア圏では、中国思想が日本のように単に文献学的にではなく、現代の哲学議論の道具として用いられている。それには様々な歴史的経緯があると思われるが、この文化的な違いが大変面白いと感じた。加えて、今回は現地の学生が台北市内を案内してくれる中で、中国茶のお店の他、故宮博物院や蒋介石を祀った中正紀念堂、旧大日本帝国台湾総督府などへ行き、台湾が様々な歴史と文化が積みあがった場所であることを実感した。

## ④ 進路への影響

報告者は現在博士課程への進学を希望している。海外の学会の日本との違いを体験することができたことは、海外の研究事情を知るという意味で意義深かった。また、研究者としてやっていくためには英語で議論ができることは必須であるが、今回はそのための経験をつむことができた。今回の経験を活かし、今後の海外留学等も視野に入れつつ、研究者として力をつけていきたいと感じた。

<事務局使用欄> 受付番号:

-